JCS/TAWC 受賞者の学会参加報告（AHA2021/ESC2021）

AHA2021 を振り返って

京都大学医学部附属病院循環器内科　山本絵里香（やまもとえりか）

第11回 Travel Award for Women Cardiologist をいただきました京都大学医学部附属病院循環器内科の山本絵里香です．このたびは誠にありがとうございました．

本来であれば今回の AHA2021は Boston で開催される予定でした．私は2015年から2018年まで Boston の Massachusetts General Hospital に留学しており，今回の AHA で日本帰国後はじめての Boston 再訪となる予定でしたので，学会活動はもちろん，学会“外”活動も色々企画して密かに胸を高鳴らせていましたが，結局 COVID-19 感染拡大がおさまらず，残念ながら今回も完全オンライン開催となりました．

多忙な毎日を過ごす臨床医にとって，オンライン開催による，時間的/体力的/金銭的メリットは大きいと思う反面，今の形のオンライン学会はもうお腹いっぱい，というのが正直なところです．とはいえわれわれの生活がコロナ以前とまったく同じ状態に戻ることはないわけで，学会の真の目的ともいえる，セレンディピティのようなものを産むために，メタバース隆盛で Web3.0に向かうこれからの時代，学会活動はどうなっていくのか，どうしていくべきなのか，いろいろ考えさせられる機会でもありました．

さて，今回私が発表した演題は，“Influence of Worsening Heart Failure During Hospitalization on the Prognosis in Patients with Acute Decompensated Heart Failure”というもので，京都大学が主導で行った Kyoto Congestive Heart Failure 研究からのサブ解析で，『入院後，すっとよくならない（＝Worsening heart failure［WHF］を起こす）心不全患者は，退院後の長期予後もよくないのではないか』という日常的に臨床医が感じる疑問点を実際大規模データで解析した，というものです．WHF に関しては，薬剤や治療の効果判定でよく使われるエンドポイントなので，長期予後をフォローした研究は少なく，今回の結論（WHF を起こす群はやはり起こさない群に比べて長期予後が悪い）は，臨床医の普段の感覚を裏づけする内容となっています．

KCHF 研究は，京都大学の加藤貴雄先生，小笹寧子先生，滋賀総合病院の犬塚康孝先生，天理よろづ病院の田巻庸道先生が中心になって立ち上げられた4,000名を超える急性心不全患者のレジストリーですが，ちょうど私が大学院生時代に研究の立ち上げの時期でしたので，データベースの構築など実務諸々を on the job 形式で学ばせていただいた，とても思い入れの強い研究です．その後，私は留学して別分野の仕事に携わることになったので，その当時大学院生だった夜久英憲先生に引き継ぎ，その後夜久先生は，コアメンバーの先生方とともにデータ収集や解析に尽力され，素晴らしい論文を何本も書かれておられます．

ちなみに私自身は，心不全の専門家ではありません．ただ subspeciality はなんであれ，循環器内科医として心不全診療は必須であり，実際私も多くの心不全患者を診てきました．その普段の日常臨床で生じるふとした疑問を，解析テーマとして研究に落とし込み，追求するのはとても有意義なことであると考えています．当科は前教授の木村剛先生が多くの臨床研究を遂行されてこられた歴史があり，日本でも有数の臨床研究が盛んな医

局ですが，今後も臨床医目線での発信を続け，また更に一歩踏み込んで，日常臨床で生じた疑問への解決策となるような，現在の日常臨床を変えるような，そんな研究をこれから創っていきたいと考えています．

最後になりましたが，今回助成いただきました，日本循環器学会ならびにダイバーシティ推進委員会の関係者の皆様にこの場をお借りして心より感謝申し上げます．

著者の COI（conflicts of interest）開示：本論文発表内容に関連して特に申告なし

＊　＊　＊